

都立高校入試に英語スピーキングテストESAT-Jの結果を用いないことを求める意見書

東京都は、2024年度都立高校入学選抜試験において、英語スピーキングテストESAT-Jの採点結果を合否判定に活用するとしている。しかし、2023年度の採点方法には下記のように様々な問題点が指摘された。

1 東京都は、次年度で撤退を表明した株式会社ベネッセコーポレーションと協定を結び、7万1000人分のテストをフィリピンの事業者へ委託し、短期間で公平かつ正確に行うことができたのか疑問である。採点結果が通知された後の検証では、解答が正しく録音されず、誤って低く採点された生徒が8人いたことも判明した。また、自身の採点結果を確認する生徒はほぼおらず、「英語の授業改善」や「高校での学習円滑に接続」とした目的にそぐわない。

2 東京都がESAT-J不受験者と認定した者には、同じ高校を受験した学力テストの結果が同程度の、10人前後の結果から算出した平均点が付与される。しかし、学力テスト結果とスピーキングテスト結果との間に、相関関係があると証明するデータは存在しない。合理性のない算出方法により得点順位が入れ替わる逆転現象が指摘され、受験生の総合順位に影響した可能性も否めない。

3 調査書点の配点は、5教科で満点の場合は一教科約23点、ESAT-Jは20点満点である。合計すると英語だけが43点になり配点が高すぎる。また、日々の提出物や小テスト、定期審査の結果などで積み上げてきた他の教科の調査書点と、たった1回15分程度のテスト結果が同程度に扱われることに合理性はない。

4 ESAT-Jは0点～100点で採点した後に、A～Fの不均等な6段階の得点域で分け、A=20点、B=16点、C=12点、D=8点、E=4点、F=0点と4点刻みの配点になり、実際の得点差との差異が生じる。1点の差が合否に関わる入試に用いるのは適切でない。

上記のように採点結果が不合理な結果をもたらす恐れがあり、中学生の将来の進路に関わる極めて重要な試験の選抜方法として不適切である。英語のスピーキング力の向上には、学ぶ楽しさを実感できる少人数学級や言語表現を重視し、自分の考えを発するための授業時間の確保が重要である。

よって、東村山市議会は、東京都及び東京都教育委員会に対し、英語スピーキングテストESAT-Jの結果を都立高校入試の合否判定に用いないことを強く求めるものである。

以上、地方自治法第99条の規定により意見書を提出する。

令和5年10月5日
東村山市議会議員 小町明夫

東京都知事
東京都教育委員会教育長